

## 「ローレッツ氏方叢」の薬剤処方への解説

著者	赤祖父 一知, 板垣 英治
雑誌名	北陸医史
巻	37
ページ	44-53
発行年	2015-02-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/42442">http://hdl.handle.net/2297/42442</a>

# 「ローレッツ氏方叢」の薬剤処方への解説

金沢市 赤祖父 一知  
板垣 英治

はじめに

藤本純吉筆記「老烈氏方叢」は先に、本誌第23巻(平成十四年)に資料の紹介として掲載されていた(1)。ローレッツは明治十三年(一八八〇)五月に愛知医学校から金沢医学校に着任した際に、産科学と衛生学をドイツ語で講義していた。この時に、本資料で薬剤処方も教えていたとみられる。その内容は二十三種の薬剤処方を簡単に記したものである。本稿では、各処方に記載された薬剤を調査して、その処方を検討した結果を記した。さらにスロイスは金沢医学館で「薬剤学」と(2,3)、「スロイス方聚」を講義していた(4,5)。さらにホルトルマンも薬剤の処方を講義した(6)。本稿ではこれらの薬剤処方の内容を比較して、「ローレッツ方叢」について論考した。薬材の使用量は次の単位で記載されている。オンス、グレイン、スクルプル、ドラーム、グラムⅡ瓦、g、ポンド。それぞれ

をグラム単位に変換して括弧内に表示した。薬剤の効用は側線を符して示した。

方 叢

一・点眼剤

一一一・黄色収斂點眼水

硫酸亜鉛 12グレイン (約0・8g)

泊芙藍 2グレイン (約0・13g)

龍腦 2グレイン (約0・13g)

蒸留水 4オンス (約124ml)

硫酸亜鉛  $\parallel$   $ZnSO_4$  充血除去、収斂作用、抗炎症

作用。

泊芙藍  $\parallel$  サフラン、*Crocus sativus* の雄蕊。

香辛料、鎮静、鎮痛、通経作用。

龍腦  $\parallel$  *camphor*、樟腦。血行、神経機能の興奮、

血管拡張作用。

一一二・ドンドルス氏點眼水

テレピン油 1g

テレピンチーナ油 1g

虞里斯林 60g

テレピン油、テレピンチーナ油  $\parallel$  松科樹木の樹

脂の成分であり、精溜油として得られる。シルベ  
ン酸、 $\alpha$ -ピネン、 $\beta$ -ピネンが含まれている。  
神経痛などに効あり。

虞里斯林 $\parallel$ グリセリン。テレピン油などをグリセリ  
ンに溶解して親水性を増して使用している。

注、ドンドルス $\parallel$ Francius Donders,

ユトレヒト陸軍医学校教授、眼科学、生理学を  
研究・教育した。

## 二、水剤 沃素剤

### 二一、腐食沃度液

沃實 25 g (沃實 $\parallel$ 沃素、Iodine)

沃剥 50 g (沃剥 $\parallel$ 沃化カリウム、

potassium iodide)

蒸留水 50 g

右溶解。

沃素と沃化カリウムで $\text{K}_2\text{I}_2$ となり、紫褐色水溶性と  
なる。この処方では水の量が少なすぎる。沃化カリウ  
ムをすべて溶解することが出来無い。単位が違ってい  
るのではないか？ 嗽薬、切り傷用塗り薬として使用。

### 二一二、沃實液

沃實 20 グレイン (約 1.3 g)

沃剥 30 グレイン (約 2 g)

蒸留水 1 オンス (約 31 ml)

右 沃化加里を水に溶解し、而后沃素を投じ、時々  
振盪し溶解して貯える。

この溶液は上記のものと同じく、沃素・沃化加里複合  
体水溶液である。用途も同じである。

### 二一三、尋常沃陳擦剤

沃陳丁幾 1 ドラム (約 3.9 g)

沃度加里 1 スクルプル (約 1.3 g)

リスリン 半オンス (約 15.5 ml)

右混和、

沃陳丁幾 $\parallel$ 沃素のアルコール溶液、ヨードチンキ

リスリン $\parallel$ グリセリン

扁桃腺炎など咽喉疾患に塗擦使用。

### 二一四、沃度叻軟羔

沃度叻 1 オンス (約 31 g)

リスリン軟膏 20 オンス (約 600 g)

Vaseline (ワセリン)

### 右 混和、

沃度防は沃化加里と沃素の混合物とみられる。沃素・

沃化加里をワセリンに煉込んだもの。

塗擦薬とみられる。

### 二一五、沃度防丸

沃度防 1 スクルプル (約 1.3 g)

甘草末

沃素・沃化加里混合物に甘草末を使薬として適量加えて 20 丸とする。甘草は甘味・増量剤である。

沃度補給剤か？ 錠剤を服用した。用途は不詳。

### 三、内科薬

#### 三一、老烈氏常用鉄液剤

半塩化鉄液 6 オンス (約 180 g)

「半」の意味は不詳

舎利別 18 オンス (約 558 g)

シロップ

蒸留水 36 オンス (約 1100 ml)

この液 1 オンス (31 ml) を取り、90 ml の水に和し、一日量とする。この溶液を服用し、鉄を補った。

貧血の治療に使用か？

### 三一二、消化液

百布晋 12 グレイン (0.78 g)

稀塩酸 15 ml

単舎利別 半オンス (15.5 g)

浄水 4 オンス (120 ml)

右一日 三回に分服

百布晋 II ペプシン、胃のタンパク質分解酵素、酸性で反応する。そのために稀塩酸を加えている。

単舎利別 (シロップ) は服用を容易にする。

### 三二三、カルルスパット塩

(名前は鉱物名 caltsbad 由来)

舎利塩 50 g

硫酸マグネシウム、胸焼け、便秘治療に使用

炭酸曹達 6 g 胃散の中和に使用

食塩 2 g

右研和、毎朝適宜を温湯 10 オンス (285 ml) 許

に溶かし、服用、一昼夜二回の便通を得せしむ。

便通薬とみられる。

### 三一四、老烈氏新法止瀉丸 (下痢止め薬)

水製阿片エキス 1 スクルプル (1.3 g)

阿片から水で抽出したエキスか？

阿魏末 3 スクルプル (3.9 g)

アギ、Assafoetida, (Ferula assa-foetida)

アフリカ産セリ科植物の樹脂様物質、香辛料、

生薬

便通をよくする

黒椒子末 2 スクルプル (2.6 g)

クロコシヨウ、健胃、鎮痛、駆虫作用あり。

右混和し40丸と為す。0.2 gの丸薬となる？

一日一丸または二丸を与える。

三一五. 老烈氏復方芦荟丸

大黄末 10 g 緩下剤

大黄エキス 10 g 緩下剤

巴豆油 6 滴

ハズ (トウダイグサ科) croton oil 下剤

葯羅巴脂 5 g

*Ipmoea jalappae*, *jalapine zuur*.

ヤーラツパ、下剤

右混和、60丸とす。強い下剤である。

三一六. 復方大黄丸

復方大黄エキス 1 スクルプル (1.3 g) 下剤

アロエ 半ドラム (約1.9 g) 下剤

格魯新篤エキス 半スクルプル (0.65 g)

コロシント 下剤

菲沃斯エキス 8 グレイン (約0.52 g)

麻酔剤

右混和、30丸とす。石松子 (ヒカゲノカズラの胞

子) を衣とする。強い下剤である。

三一七. 苦味丸

格倫僕 (根) 末 1 ドラム (3.9 g)

*Menispermum palmatum* の根部の粉末、苦味剤

大黄末 1 ドラム 下剤

大黄エキス 1 ドラム 下剤

健質亜那エキス 1 ドラム 健胃剤、ゲンチャナ

右80丸となす。胃腸薬

三一八. 加鉄苦味丸

格倫僕 (根) 末 1 ドラム 苦味剤

大黄末 1 ドラム 下剤

大黄エキス 1 ドラム 下剤

健質亜那エキス 1ドラム 健胃剤

\* 水素還元鉄 24グレイン

右 混和 80丸為す。一日の量 9〜10丸服用、

胃腸薬

\* 酸化第二鉄を水素炎で還元して製した鉄の微細

粉末

四 含嗽剤 (うがいくすり)

四一 一 菩荅氏溶液 Botoi's solution

Botoi 不詳

アニス 60g aniseed 八角 香料

丁香 20g 香料、グロープ 健胃剤

広東桂皮 20g \* 桂通、芳香剤 健胃剤

薄荷油 1g メントール 局所刺激薬

コーセニール 5g コチニール 赤色素

バニラ 1g 香料

薔薇水 200g 香料水

\* 中国産、生のままコルク皮を剥除せず乾燥した

桂皮。

四一 二 甘草錠剤

バニラ 2g 香料

甘草膏 250g

甘み成分 グリチルリチン

アラビアゴム 1000g 粘性剤

卵白 20箇

白糖 1000g 甘味剤

以上を煉調して、菱形状に製造す。咳、喉の痛み

の緩和剤

四一 三 老烈氏鎮咳液 (せきどめ)

萹蓄エキス 3グレイン (約0.2g)

ロート根、ハシリドコロ根のエキス、鎮痛、鎮痙薬

ヒヨスエキス 3グレイン (約0.2g)

アトロピンを含む。鎮痙薬、麻酔、喘息、咳嗽剤

硫酸モルヒネ 1グレイン (0.065g) 麻酔

剤

金硫黄 24グレイン (約1.56g)

五硫化アンチモン、利尿、百日咳、喘息に効あり。

橙皮糖煉 4オンス (約120g)

マーママレード、祛痰、健胃剤

蜀葵根煎 6オンス (180g)

タチアオイ、Althaea rosea, 根部の煎液、利尿作

用

白糖 2ドラム (約7.7g) 砂糖

薄荷油 2滴 メントール、清涼剤

亜刺比亜護膜 20グレイン (1.3g)

アラビアゴム、増粘剤

鎮痛薬として使用していた。

#### 六. 抗菌剤

六一一. 弱昇汞水 (丸剤)

昇汞 22.5グレイン (1.46g)

阿片 36グレイン (2.34g)

右混和して、360丸となす。一丸中に昇汞16分

の1グレイン、阿片 10分の1グレインを含有する。

細菌性の疾病、梅毒に使用か？

#### 四一四. 鎮咳散 (せきどめくすり)

金硫黄 18グレイン (1.17g)

硫化アンチモン、咳どめ

菲沃斯エキス 6グレイン (0.39g)

アトロピンを含む 鎮痙薬、麻酔、喘息、咳嗽剤

萹荳エキス 9グレイン (0.59g)

ルート根、ハシリドコロ根のエキス、鎮痛、鎮痙薬

硫酸モルヒネ 1.5グレイン (0.1g)

麻酔剤

白砂糖 適宜

右混和、36包に為す

#### 五. 注射薬

##### 五一一. 注射膜児非涅液

モルヒネ 3グレイン (0.2g)

水 1オンス (114ml)

通常5m (ml) までを取り、皮下に注入す。

#### 七. 皮膚病薬

##### 七一. フリック膏、Flick's 皮膚病治療用軟膏

亜鉛花軟膏 15g

酸化亜鉛 (ZnO) を流動パラフィンに混ぜる。

皮膚の炎症を和らげる。皮膚の再生を促進。

百露拔兒診護（護膜） 4g

バルサムゴム、*Tolulifera pereirae* Ballion,

Balsamum pervianum の樹液より製す。

硝酸銀 6デシグ〜1gまで

殺菌作用

右混和、軟膏の調と為す。

バルサムゴムで軟膏の粘性を増している。

## 考察

「ローレッツ氏方叢」は先に赤祖父等によりその資料の紹介が本誌（1）にされていたが、今回はその記載された処方箋の薬用成分の解説を行い、その処方がどのような分野の疾患に使用されたものであるかを明らかにした。得られた結果を基に分類して順序を改めて本稿では記載した。項目は点眼剤2種、沃素水剤5種、内科薬8種（内7種は胃腸薬である）、含嗽剤及び鎮咳剤4種、注射薬（鎮痛剤）1種、抗菌・殺菌剤2種、皮膚病薬1種であった。

この「ローレッツ氏方叢」（1）と同時代の「ホルトルマン氏方集」（6）の特徴は、「スロイス氏薬剤録」（2、3）に比べて、無機化合物の使用例が増加している事である。本資料（1）には次の11種の無機化合物

名が記載されている。

硫酸亜鉛、酸化亜鉛、沃素、沃化カリウム、塩化鉄、

硫酸マグネシウム、炭酸ナトリウム、水素還元鉄、硝酸

銀、金硫黄（五硫化アンチモン）、昇汞（塩化水銀（II））

これは無機化学および薬化学の進歩により、その生理的な作用が明らかになってきた為に、無機化合物の採用が増加したと考えられる。沃素水剤五種類が記載されているのも特徴である。

次に本方叢には「消化液」に、胃液のタンパク質分解酵素である百布晋（ペプシン）が使用されていることが注目される。この酵素の使用例は「ホルトルマン氏方集」（6）にも多くの例が掲載されている。これを表1にまとめた。わが国での酵素の薬剤としての使用の始まりを調べると、スロイス氏薬剤学（2）には記載はされていない。翌明治5年に刊行された「官版・薬局方」海軍軍医寮（7）にペプシンについての記載がある（図1）。本書は英国薬局方（第二版、1867年刊）（8）の翻訳をもとに編輯されたものである。その後の「陸軍軍医寮薬局方」（8）、および明治19年の「日本薬局方」（9）にも、ペプシンが「含糖百弗聖」*Pepsinum saccharatum*として掲載されていた。本品は豚あるいは牛の胃粘膜より得た胃液



(消化性成分)に乳糖を加え混ぜたものであった(9)。胃液のペプシンは1836年にテオドル・シュワンに依り発見された(10)が、これが1870年代に、わが国で「消化薬」の医薬品として使用され初めていた。まさに、「酵素」が医薬品となつた最初の例であり、生化学史的にも重要な事柄である。以上、明治初期の処方箋の例として「ローレッツ氏方叢」の解説を行い論考を記した。

文献

1. 赤祖父一知、今井美和「老烈氏方叢」藤本純吉記『北陸医史』第二三巻、第一号、平成十四年、一一八頁。  
『老烈氏方叢』藤本純吉記、金沢市立玉川図書館・近世史料館蔵
2. スロイス講述、藤本純吉筆記『スロイス氏薬剂学』金沢市立玉川図書館・近世史料館蔵
3. 板垣英治「スロイス薬剂学に記載された生物由来の有効成分」『北陸医史』第三三号、平成二三年、三六一―四八頁
4. スロイス講述、藤本純吉筆記『スロイス氏方聚』明治五年、金沢市立玉川図書館・近世史料館蔵

5. 板垣英治「スロイス方聚・スロイスの調剂処方箋」『北陸医史』第三四号、平成二四年、一八一―二五頁
6. ホルトルマン講述、藤本純吉筆記『ホルトルマン氏方集』明治八年、金沢市立玉川図書館・近世史料館蔵
7. 奥田虎炳閱、前田清則訳補、『官版・薬局方』海軍軍医寮、明治五年、百八七丁、近代デジタルライブラリー。(図1)
8. 二宮一彌「日本薬局方物語」『薬学図書館』三九(一)、二二―二七頁、(一九九四年)
9. 『日本薬局方』内務省編、明治一九年、百二二頁、近代デジタルライブラリー。
10. Wikipedia, Pepsin, History.

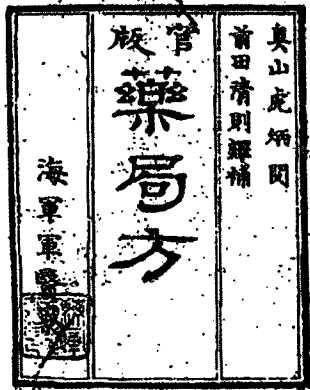


図1 「官版・薬局方・海軍軍医寮」  
標題頁 明治五年、発行  
近代デジタルライブラリーより

表1. ペプシンを含む処方

ローレツ (1)

消化液 百布晋 12 グレイン、稀塩酸 15 m、単舎利  
別 半オンス、浄水 4 オンス。一日三回に分服

ホルトルマン (6)

丸剤 57

ペプシ子1 莪、\*レウム半莪、芦薈 10 グレイン、  
莨菪エキス 3 グレイン、コロムボ末、ヘレニーエ  
キス適宜、

\* Rheum officinale Bail, 大黃、健胃薬

右為 30 丸朝夕五粒宛 (26 丁)

水剤 44

\* 茴香水 6 オンス、重炭酸曹達半莪、ペプシ子1 莪、  
右每 2 時 1 匙、白ブドウ酒に溶解するを好しとす  
\* ウイキョウ、フェネル、Foeniculum vulgare

芳香健胃剤

(15 丁)

水剤 47

ペプシ子1 莪、重炭酸曹達1 莪、レーンワイン  
\* 1 オンス。

右每食時 2 莪宛

\* 赤ブドウ酒

(15 丁)

水剤 54

ホロラルヒドレート \* 1 莪、ペプシ子1 莪、オラ  
ニーストロップ \* 2 オンス。

右每 2 時 1 オンス宛

(17 丁)

\* 稀塩酸、\* オレンジシロップ

水剤 55

レアコーサ丁幾 1 オンス、苦味酒 2 オンス、  
\* コロムボ浸 3 オンス、薄荷油 6 滴、ペプシ子 2  
莪

右每食前半食匕

(17 丁)

\* ツツラフジ科コロンの根部の乾燥粉末、苦味  
健胃剤。レアコーサ 大黃

水剤 68

ペプシ子1 莪、卵白 4 箇、テバイカ \* 丁幾 1 匁半、  
硝石 1 匁、水 6 オンス

右每時 1 匙 \* Hyphaene thebaica = Down palm

(やしの一 種)

(17 丁)

散剤 51

ペプシ子1 莪、薄荷油 6 滴、\* フクリカンクル 1 莪、  
重炭酸曹達 1 莪、マグネシア半莪。

\* ザリガニの胃石、

右 12 包と為す。1 日 3 回 1 包宛

(7 丁)

注. ホルトルマンの処方番号は整理番号(X丁)は掲載頁。